



ブラネシュティ村は、もともとブルガリアからの移住民によって建てられた村である。ブラネシュティ村にブルガリア人たちがやってきた時期についてはいくつかの異なった意見があげられるが、おおよそ 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてであると考えられている (Roman 1984: 137, Младенов 1993: 34)<sup>ii</sup>。彼らは、ドナウ川沿岸地域に位置する村のカリペトロヴォ (Калипетрово) やガルヴァン (Гарван)、ポピナ (Попина) など、ブルガリア共和国北東部のシリストラ (Силистра) 近郊の村の出身である (Романски 1930: 432, Bolosan 1958: 491, Жечев 1983: 59, Еников 1983: 12-13, Младенов 1993: 34)。この事実は、彼らがいわゆるグレーベンツィ (гребенци)<sup>iii</sup>であることを示す (Кочев 1969: 5)。

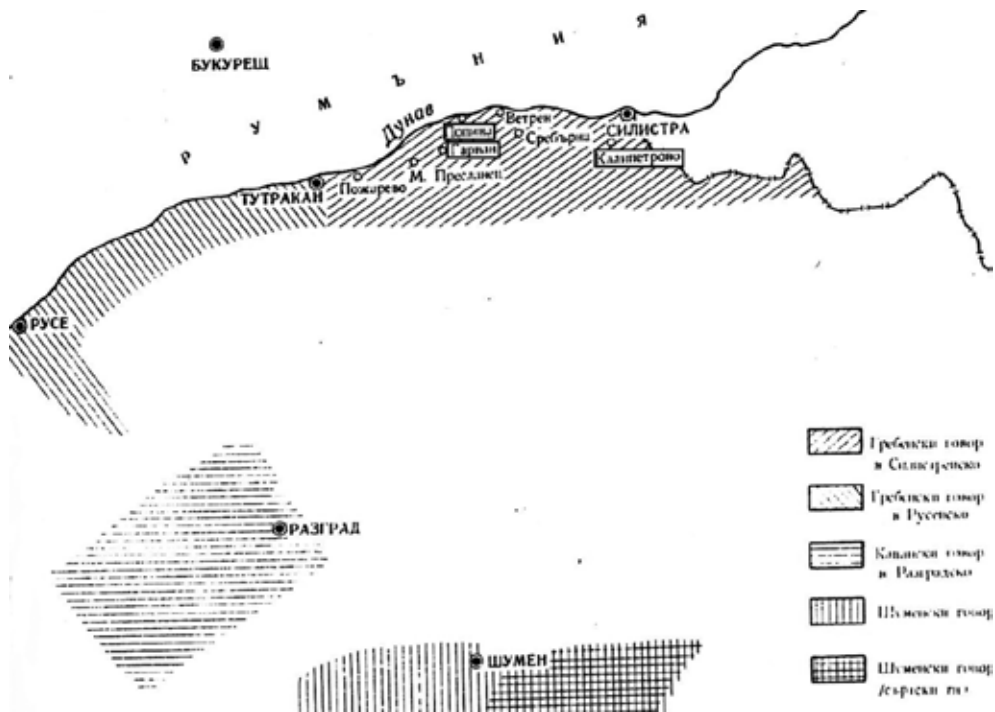
20 世紀初頭に、言語学者・民俗学者であったストヤン・ロマンスキがワラキア (ルーマニア南東部) のブルガリア人集落を訪問しており、彼の手紙には、その当時のブラネシュティ村 (Бранец) について次のように述べられている:「ブラネシュティは、“グレーベンツィ”の住処である。＜中略＞村には現在でも 466 世帯 2110 人のブルガリア人がおり、そのうちおよそ 10 世帯のみワラキア系で、そのワラキア人たちはブルガリア語を知っている。」(Жечев 1983: 59) さて、筆者の 2012 年の春と秋に行った現地調査により、現在のブラネシュティ村では、ブルガリア語話者は主に高齢者に限定されている。彼らは、みなルーマニア語とのバイリンガルである。一方で、若い世代の人々はブルガリア語を知らず、ルーマニア語のみしか話すことができない状況にある。ブラネシュティ村のルーマニア化は急速に進んでおり、これから 10 年～20 年のうちにブルガリア語のブラネシュティ方言は消滅すると考えられる。

ブラネシュティ方言はこのような危機的な状況にある一方で、筆者が調査のために訪問した他のブカレスト近郊の村落と比べれば、少なくとも高齢の話者は比較的よく自分たちの方言を保持している。このことは、筆者が同方言に着目して調査を行い、本稿の主たる研究対象とした理由の一つでもある<sup>iv</sup>。

## 1.2. ブラネシュティ方言について

ブラネシュティ方言は、ブルガリア語の方言区分中の、ミジヤ方言群 (Мизийски говори, Moesian dialects) に属するとされる (Младенов 1993)。ブルガリア語は、いわゆるヤットの境界 (ятова граница)<sup>v</sup>を基準に、大きく東方言と西方言の二つの方言グループに分けられる。ミジヤ方言群は、東方言の下位方言群であり、主にブルガリアの北東に分布する方言群である。標準ブルガリア語の基盤となったバルカン方言群と隣接する方言群であり、共有する特徴も少なくない。ミジヤ方言群にはさらに下位方言が存在し、それはグレーベン方言、ラズグラッド方言、シューメン方言である (Кочев 1969: 5-7)。ブラネシュティ村の住人は、すでに 1.1. で見たように、ドナウ川沿岸地域の村出身のいわゆるグレーベンツィであり、したがって彼らの方言はグレー

ベン方言（гребенски говор）の一種と考えられる。グレーベン方言は、シリストラからルセ（Русе）にかけてのドナウ川沿岸地方に点在する村で話されている。これは、後に別の地方からの移住者などとの混住によりかつての言葉と移住者の言葉が混ざったラズグラッド方言やシューメン方言とは異なり、古い北東ブルガリア語方言の言語的統一性がよく保たれている（Кочев 1969: 5）。このグレーベン方言は、また、ルセとトゥトラカン（Тутракан）間とトゥトラカンからシリストラ間でそれぞれ下位方言が存在する。前者はルセ・グレーベン方言（Гребенски говор в Русенско）で、後者はシリストラ・グレーベン方言（Гребенски говор в Силистренско）である（Кочев 1969: 6-7）。ブラネシュティ方言は、話者の出身村がトゥトラカン・シリストラ間の村々（カリペトロヴォ、ガルヴァン、ポピナの三村、cf. 地図 2）であることからわかるように、シリストラ・グレーベン方言が土台になっている。



地図 2：北東ブルガリアにおけるミジャ方言群（Кочев 1969: 7）

ブラネシュティ方言に関して、もう一つ指摘しておくべきことがある。それは、ブラネシュティ方言が、ルーマニアへの移住後に形成された標準ブルガリア語との接触を現在に至るまで持っていないということである。ゆえに、標準ブルガリア語の影響を受けることなく、移住時のブルガリア語方言がよく保存されている。また話者はキリル文字も読むことはできない。

### 1.3. 調査の概要

筆者は、2012年の春と秋に二度に分けて、ブラネシュティ村を訪問し、現地調査を行った。その概要は次にまとめるとおりである。

調査日：2012年5月3, 4, 9日 / 10月29, 31日 / 11月2, 8日、合計7日間

調査方法：本稿執筆者との対話をICレコーダで録音（自然発話の例のみ）

音声資料：合計約22時間

インフォーマント：6名

DD【男、88歳】、DG【男、77歳】、TM【女、73歳】、

BV【女、80歳】、TO【女、80歳】、BP【女、82歳】

### 1.4. 先行研究

まず、ブラネシュティ方言を対象とした研究には、主に音声の研究である Bolocan (1958, 1960, 1969), Болокан (1968) や、定語の語順に関する研究である菅井 (2012a)、同方言の目的語接語重複の概要を提示した Сугай (in press) がある。一方で、Младенов (1993) は、ルーマニアに分布するブルガリア語諸方言の総体的な研究を行っているが、その中でミジヤ方言群も取り上げており、当然ブラネシュティ方言もその中に含まれている。Младенов (1993: 305-306) は、ルーマニアのミジヤ方言群にみられる目的語接語重複について、「ほとんど規則的に直接目的語と間接目的語は重複」し、「... [重複を受ける] 名詞類は常に冠詞形になるか、指示代名詞を伴っている。これが示すのは、目的語重複のモデルが、同現象のブルガリア語に一般的なモデルから逸脱していないという事だ」と述べている。

他方、標準ブルガリア語における目的語接語重複は、広く研究が行われており、一般的にそれは随意的に実現するとされる (cf. Цивьян 1965: 34, Лопашов 1978: 28, Маслов 1982: 304-305, Franks & King 2000: 251 etc.)。標準ブルガリア語に関しては、目的語接語重複が目的語をトピック化する形態統語的な手段であるとされる (cf. Guentchéva 1994, Асенова 2002 etc.)。一方で、文法的に義務的に接語重複されるような場合も存在する。ゆえに、ブルガリア語の目的語接語重複は、目的語のトピック化と関係する語用論的な動機に基づいた重複と、文法的な動機に基づいた重複の二つのタイプが区別される。本稿では、Krapova & Tisheva (2006) 及び Тишева & Кръпова (2009) に従い、前者を「語用的重複 (прагматично удвояване)」と呼び、後者を「文法化重複 (граматикализирано удвояване)」と呼ぶこととする。文法化重複は、一般的には次のタイプの述語を伴った、義務的に実現される接語重複を表すものとする：対格 / 与格の経験者 (experiencer) の項を要求する心理・身体的状態を表す述語、モデルな述語、存在 / 不在を表す述語 (cf. Krapova & Cinque 2008 etc.)。

また、ブルガリア語における目的語接語重複の研究史中では、動詞に対する目

的語の占める位置関係で、二つの構文タイプが区別されてきた (cf. Минчева 1969, Лопашов 1973, Асенова 2002)。それは、目的語が動詞に先行する「繰返し式 (реприза, resumption)」と、目的語が動詞に後続する「先取り式 (антиципация, anticipation)」である。本稿では、Тишева & Кръпова (2009) に従い、前者を左方転位 (лява дислокация, left dislocation)、後者を右方転位 (дясна дислокация, right dislocation) と呼ぶこととする。右方転位については、目的語が占める位置はブルガリア語では一般的な動詞の後ろの位置であり、これは目的語が転位されたのではなく元来の位置を占めていると考えることもできよう (cf. Тишева & Джонова 2006, Tisheva 2007, Тишева 2009, 菅井 2012b)。しかし、目的語が実際に転位されたかどうかについて検討することは、本稿の目的に合致しない。したがって、本稿ではその点について深入りはせず、先行研究にのっとりあくまでも用語として、接語重複を伴った目的語が動詞に後続する位置を占めているような構文を右方転位と呼ぶこととする。

さて、標準ブルガリア語以外にも、ブルガリア語諸方言を対象とした目的語接語重複の研究は近年いくつか例がある (cf. Джонова 2007, Кръпова & Тишева 2007)。中でも、Krapova & Tisheva (2006: 417) 及び Тишева & Кръпова (2009: 212-213) は、ブルガリア語諸方言にみられる目的語接語重複の一般的特徴について明らかにしている。本稿では、彼女らが挙げている一般的な特徴のうち、次の二点に注目しよう。一点目は、左方転位と右方転位を比べた場合、左方転位のほうが圧倒的に広く分布しているということ。この事実は、トピックの要素を文中の前方に持ってこようとする左方転位の語用論的な特性に、その論理的な説明を求めることができるという。二点目は、接語重複される要素に、左方転位と右方転位で違った傾向があるということ。左方転位の場合、人称代名詞や、その他の名詞句 (主に、定 (definite)、特定 (specific, един を伴った場合) の名詞句) など様々な要素が左方転位によって接語重複されうる。その一方で、右方転位の場合、接語重複される要素としては、語彙的な名詞句 (full noun phrase) が中心で、例えば人称代名詞の接語重複の例はまれであり、定代名詞の例は見られないとまで述べている。

本稿では、以上の先行研究の記述を踏まえて、ブラネシュティ方言における目的語接語重複を対象とし、次の点を検討する。すなわち、ブラネシュティ方言の目的語接語重複は、Младенов (1993) の記述にあるようにブルガリア語に一般的なモデルから逸脱していないかどうかを、特に Тишева & Кръпова (2006, 2009) の記述する点を踏まえた検証を行う。

## 2. ブラネシュティ方言における目的語の接語重複

本章では、ブラネシュティ方言における目的語接語重複の例<sup>vi</sup>を示しながら検討を行う。2.1. において語用的重複を、2.2. において文法化重複の例をそれぞれ左方転位

と右方転位にわけて見ていく。

## 2.1. 語用的重複

語用的重複に分類されうる例は、すべてで 174 例見られた。まず、左方転位の例を見てみよう。

- (1) a. *Кѣштата тѣс тоѹ ѥѣ напраѹ.*  
house.F.SG.+the.F.SG. this.F.SG. he.NOM. her.ACC.CL. make.AOR.3.SG.  
「この家は彼が作った。」(TM1/1.04.03)
- b. *Фсѣте прѣзници ни ги дѣржѹм.*  
all+the.PL. holiday.PL. not them.ACC.PL. hold.PRS.1.PL.  
「すべての祝日を保持しているわけではない。」(BV1/55.26)
- c. *На нѣгу му напраѹю дѣсет милиѡна пѣнсийа.*  
DM. him.ACC. him.DAT.CL. make.AOR.3.PL.10 million pension  
「彼には 1000 万の年金が与えられた。」(TM1/15.24)
- d. *Мѣне каѣа ми господѹн Флѡрин.<sup>vii</sup>*  
me.DAT. tell.AOR.3.SG. me.DAT.CL. Mr. Florin  
「私にフロリン氏が言った。」(DD1/3.34.46)

いずれの場合も、目的語にあたる語は動詞に先行する位置を占めている。また、いずれも同一指示の人称代名詞の短形による重複を受けている。(1a), (1b)は対格、(1c), (1d)は与格の例である。語用的重複の左方転位の例数は 65 例であり、そのうち 24 例が人称代名詞で、その他の名詞句は 41 例であった。その他の名詞句中、定 (definite) である例が 39 例を占め、единを伴い特定 (specific) と判断される例は 2 例確認できた。特定と判断される例を以下に示そう。

- (2) a. *Ино мумѣнце малку тѣѹ, пѣснаѹо*  
a.N.SG. little-girl.N.SG. little.N.SG. so let-go.AOR.3.PL.  
*ѣѹ съз инѡ съмѹн л'ан.*  
her.N.SG.ACC.CL. with one.N.SG. loaf.M.SG. bread.M.SG.  
「ある小さな女の子は、大きなパンを持っていかされた。」  
(DD1/2.01.39)
- b. *Ино мончѣ, идѹн другѣр ѹт мѡѹ, тоѹѹ,*  
a.N.SG. little-boy.N.SG. a.M.SG. friend.M.SG. from my your

зòснод'ъ                      да      зү                      прости.
   
 Lord.M.SG.+the.M.SG. SMP. him.N.SG.ACC.CL. forgive.PRS.3.SG.
   
 「男の子を、私やあなたの友人を、主がお許しくくださいますように。」
   
 (DD1/1.25.21)

次に右方転位の例を見てみよう。

(3) a. *Ас      ие      зү                      ви́кам                      и      пъ      не́зү.*
  
 I.NOM. FUT. him.ACC.CL. call.PRS.1.SG. also AM. him.ACC.
   
 「私は彼も呼んでくるわ。」 (TM1/19.27)

b. *Гү                      ви́деф                      пъ      Йо́н.*
  
 him.ACC.CL. see.AOR.1.SG. AM. Ion
   
 「イオンに会った。」 (DG2/1.26.54)

c. *Аз      мү                      ка́зам                      и      на      Не́лү.*
  
 I.NOM. him.DAT.CL. say.PRS.1.SG. also DM. Nelu
   
 「私はネルにも言っている。」 (BV2/1.14.56)

d. *Йи́уме                      да      ти                      зү                      да́м*
  
 want.PRS.1.SG. SMP. you.DAT.CL. it.ACC.CL. give.PRS.1.SG.
   
*на      те́бе.*
  
 DM. you.DAT.
   
 「あなたにそれをあげたいの。」 (TM1/1.20.47)

目的語にあたる語は、動詞に後続する位置を占めている。また、それと同一指示の人称代名詞の短形による重複がある。この時、(3a), (3b) は対格、(3c), (3d) は与格の例である。語用的重複による右方転位の例は、109 例観察された。そのうち、61 例が人称代名詞、48 例がその他の名詞句であり、いずれも定であった。

以上でみたように、語用的重複では、左方転位の例数が 65 例なのに対して、右方転位の例数が 109 例である。右方転位の例数のほうが左方転位の例数よりも多く観察され、その比率は左方転位が 37% なのに対して、右方転位は 63% である。これは、Krapova & Tisheva (2006), Тишева & Кръпова (2009) が指摘する一般的な特徴からはずれた傾向であるといえるであろう。また、重複される要素としては、一般的には、定の目的語が重複を受け、左方転位の場合には特定の目的語が重複を受ける例も見られた。これはブルガリア語諸方言に見られる一般的な特徴に合致する。その一方で、右方転位で重複を受ける要素としては、人称代名詞が 61 例見られ、その他の名詞句

の48例を上回った。Krapova & Tisheva (2006), Тишева & Кръпова (2009)によれば、ブルガリア語諸方言に一般的な特徴として右方転位で人称代名詞が重複を受ける例はまれであるということから考えると、明らかに異質な傾向であるといえよう。

## 2.2. 文法化重複

次に、文法化重複の場合を、やはり左方転位(4)と右方転位(5)に分けて見ていく。左方転位の例は、全部で39例確認された。

- (4) a. Mène      ни      ми      й      mèшкy.  
 me.DAT. not me.DAT.CL. be.PRS.3.SG. hard  
 「私にとってはつらくない。」(DD2/4.32.34)
- b. Mène      ми      й      йòе.  
 me.DAT. me.DAT.CL. be.PRS.3.SG. good  
Ам на нэгy      му      и      студèнy.  
 but DM.him.ACC. him.DAT.CL. be.PRS.3.SG. cold  
 「私は大丈夫、でも彼は寒い。」(BV2/3.00.05)
- c. Hègy      му      харèсaÿъ      да      pàбyти.  
 him.DAT. him.DAT.CL. like.PRS.3.SG. SMP. work.PRS.3.SG.  
 「彼は働くのが好きだ。」(DD1/1.03.25)
- d. И      мèне      ми      на̀ре      pъÿ.  
 also me.DAT. me.DAT.CL. it-seems bad  
 「私にもよくないように思われます。」(TO1/25.40)

一方で、右方転位の例は、次の2例だけ観察された。

- (5) a. Ни      ни      тp'àба      ништы      на      на̀с  
 not us.DAT.CL. it-is-necessary.PRS.3.SG. nothing DM. us.ACC.  
 「我々には何も必要ありません。」(DD1/1.26.04)
- b. Ам      какъф      ти      харèсÿъ      тèбе?  
 but what-kind-of.M.SG. you.DAT.CL. like.PRS.3.SG. you.DAT.  
 「どんなのが好きなの？」(BV1/27.30)

したがって、文法化重複の例数は全部で41例であり、そのうち左方転位は39例、右方転位は2例であった。百分率で表すと95%が左方転位であり、5%が右方転位ということになる。これは、左方転位のほうが圧倒的に多いという一般的な傾向と合致



しているといえるであろう。また、重複される要素はすべてが人称代名詞であった。

本節では次のことが明らかになった。すなわち、文法化重複では、左方転位の例数が圧倒的に多く、ブルガリア語に一般的な特徴に合致する。他方、語用的重複では、左方転位の例数を右方転位の例数が上回り、さらに右方転位で重複される要素として、人称代名詞が多くの割合を占めている。これは、ブルガリア語に一般的な特徴から逸脱した傾向である。

### 3. 前置詞 ПЪ と接語重複

ブラネシュティ方言では、直接目的語の前で特別な前置詞 ПЪ<sup>viii</sup> の使用が見られる。本節では、この前置詞の用法と接語重複のかかわりに着目する。

#### 3.1. 前置詞 ПЪ について

ルーマニアのブルガリア語方言の研究を行った Младенов (1993: 381-382) と Димчев (1974: 256-257) は、同方言にみられる前置詞 ПЪ の使用は、ルーマニア語とブルガリア語のバイリンガリズムによりもたらされたものであると分析している。この ПЪ という前置詞自体も、ルーマニア語の PE の直接的な借用であるとされ<sup>ix</sup>、ルーマニアのブルガリア語方言で ПЪ は、ルーマニア語の PE もそうであるように、一種の対格標識の役割を持つと考えられる。Младенов (1993: 305) は、そのような対格標識としての ПЪ の使用はブルガリア語の統語論の観点から言うとは完全に余剰であると述べる一方で、ПЪ を伴った「直接目的語はほとんど常に<中略>重複を受ける」といった指摘をしている。ゆえに、この ПЪ と直接目的語の接語重複には何らかの相関性の存在を仮定することができよう。したがって、本節では、ブラネシュティ方言における、前置詞 ПЪ と直接目的語の接語重複に的を絞った分析を行う。

それに先立ち、まずブラネシュティ方言における前置詞 ПЪ の用法について検討してみたい。ルーマニアのブルガリア語方言では、前置詞 ПЪ はすべての直接目的語に用いられるわけではない。どのような場合に用いられうるかなど、ルーマニアのブルガリア語方言全般における ПЪ の用法の特徴については、Младенов (1993: 381) が分類を行っている<sup>x</sup>。ただし、ここではブラネシュティ方言に限定したときにどうであるかを確認しておこう。

まず、人称代名詞の対格形に対しては、以下 (6a), (6b) にみるように、ほとんど義務的に用いられる。ただし、一例のみ ПЪ を伴わない例が観察されたので、その例も (6c) に示す。人称代名詞対格形が直接目的語である例は 62 例観察され、そのうち 61 例が ПЪ を伴っていた。

- (6) a. *Мъ* *пока̀ниѣ* *пъ* *мѣне.*  
 me.ACC.CL. invite.AOR.3.PL. AM.me. ACC.  
 「私は招待された。」(DD1/2.46.13)
- b. *Ше* *тъ* *бийми* *пъ* *тѣбе*  
 FUT. you.ACC.CL. beat.PRS.1.PL. AM.you.ACC.  
*на* *м'асту* *на* *т'аф.*  
 at place.N.SG. of them.ACC.  
 「彼らの代わりに（私たちが）お前をたたくぞ。」(BV2/2.23.43)
- c. *И* *т'аф.* *ѡи* *зѣѣо,* *пра̀иѣо* *нѣшту...*  
 also them.ACC. them.ACC.CL.take.AOR.3.PL. do.AOR.3.PL. something  
 「彼らも連れて行かれ、何かされたのだ。」(DD2/2.14.50)

一方で、それ以外の名詞句では、ПЪの使用は全くもって義務的ではない。ただし、人を表す場合にはПЪを伴うのが一般的である。これは、Младенов(1993)やДимчев(1974)の記述と並行する。次の(7a), (7b)は普通名詞であり、(7c)は指示代名詞、(7d)は不定代名詞である。いずれも人を表している。

- (7) a. *Удѡ'ѣ* *пузнѡваши* *пъ* *чил'а̀ку* *ѡнзи*  
 from-where know.PRS.2.SG. AM.man.M.SG.+the.M.SG. that.M.SG.  
*уд* *Брънѣшт?*  
 from Brănești  
 「どうやってあのブラネシュティの男性と知り合ったのか。」  
 (TO1/3.12)
- b. *Видѣф* *пъ* *Мърийѣ.*  
 see.AOR.1.SG. AM. Maria  
 「(私は) マリヤに会った。」(DG2/1.27.59)
- c. *Ѡнзи* *виѡ'а* *пъ* *ѡнзи.*  
 that.M.SG. see.AOR.3.SG. AM. that.M.SG.  
*унѡзи* *виѡ'а* *пъ* *ѡнзи...*  
 that.F.SG. see.AOR.3.SG. AM. that.M.SG.  
 「あの人はあの人を見て、あの女の人はあの人を見て…」(BV1/47.18)
- d. *Ти* *ча̀каши* *пъ* *н'а̀кой?*  
 you.NOM. wait-for.PRS.2.SG. AM. somebody  
 「あんたは誰かを待っているのか。」(DD1/57.51)

その一方で、次の (8) に見るように、人を表す名詞句であっても常に ПЪ が用いられるわけではない。(8a) は定の普通名詞句、(8b) は指示代名詞の例である。

- (8) a. *Ний нитаўми наште майка и тейку.*  
 we.NOM. ask.AOR.1.PL. our+the.PL. mother.F.SG. and father.M.SG.  
 「私たちは母や父に尋ねました。」(TO1/17.24)

- b. *Ше намёриши тѣс, тѣс, тѣс...*  
 FUT. find.PRS.2.SG. this.F.SG. this.F.SG. this.F.SG.  
 「(あんたは) こんな女の子やこんな女の子を見つけるわよ」  
 (BV2/2.05.38)

以上より、ブラネシュティ方言における前置詞 ПЪ は、人称代名詞対格形にはほぼ義務的に用いられる。また、それ以外の名詞句については、人を表す場合に用いられる傾向が強い (cf. Младенов 1993, Димчев 1974)。その一方で、(8) などの例が示すように、その用法は絶対的ではない。

### 3.2. 前置詞 ПЪ を伴った直接目的語の接語重複

まず、前置詞 ПЪ を伴った直接目的語の接語重複に着目する。ПЪ を伴った人称代名詞の接語重複は、ほとんどの場合で実現するが、重複が見られない例も全 61 例中 5 例見られた。他方、人称代名詞以外の名詞句が ПЪ を伴う場合、以下 (9c), (9d) 及び (10c), (10d) にみるように重複のある場合と、すでに (7) でみたように重複がない場合の両方が見られた。以下で、左方転位 (9)、右方転位 (10) の順に接語重複が行われている例を見ていく。

- (9) a. *Пъ мене мъ познаваўо мл'огу хора.*  
 AM. me.ACC. me.ACC.CL. know.IMP.3.PL. many people  
 「私のことはたくさんの人が知っていた。」(DD2/23.41)

- b. *Пъ мене ни мъ устаўо мл'огу на школуль.*  
 AM. me.ACC. not me.ACC.CL. leave.AOR.3.PL. much at school.F.SG.  
 「私は学校にたくさんは行かしてもらえなかった。」(BV1/37.12)

- c. *И пѣ жина му, и пѣ негу, ги*  
 also AM. wife.F.SG. his also AM.him.ACC. them.ACC.CL.  
*ымпушкѣ.*  
 shoot.PRS.3.SG.  
 「彼の奥さんのことも、彼のことも撃ったのよ。」(TO1/35.25)

- d. Пѣ моѣта майка, пѣ моѣ тѣйку да  
 AM. your+the.F.SG. mother.F.SG. AM.your.M.SG. father.M. SG.SMP.  
ми џи дунсѣи ын пузѣ.  
 me.DAT.CL. them.ACC.CL. bring.PRS.2.SG. in photo  
 「あんたの母さんと父さんを写真で持ってきてなさい」(BV2/46.21)

(9a), (9b) は人称代名詞対格形が、(9c), (9d) ではその他の名詞句が直接目的語である例である。Пѣ を伴った直接目的語の接語重複が、左方転位で実現されている場合の例数は 28 例であった。この時、重複を受けている要素は、いずれも定冠詞が指示代名詞を伴った名詞句あるいは人称代名詞であった。

次に右方転位の場合を見てみよう。

- (10) a. Тѣ ажутѣ пѣ тѣбе  
 you.ACC.CL. help.PRS.3.SG. AM. you.ACC.  
дѣ май доѣди на мѣне.  
 SMP. more come.PRS.2.SG. at me  
 「(彼が) 私のところにまた来れるようにあんたを助けてくれる。」  
 (TO1/1.47.39)

- b. Мл'ѡџу џи пумѡгнаф пѣ т'ѡф.<sup>xi</sup>  
 much them.ACC.CL. help.AOR.1.SG. AM. them.ACC.  
 「(私は) 彼らのことをいっぱい助けた。」(DD1/3.05.26)

- c. Ни ѣѣ рѣчи соѣѣкрѣта  
 not her.ACC.CL. like.AOR.3.SG. mother-in-law+the.F.SG.  
пѣ моѣта дѣштерѣ.  
 AM. my+the.F.SG. daughter.F.SG.  
 「その義母は私の娘のことを気に入らなかった。」(TO1/33.10)

- d. Пѣк моѣ ѣѣ ѣштемѣ пѣ Дѡбра.  
 but he.NOM. her.ACC.CL. want.IMPF.3.SG. AM. Dobra.F.SG.  
 「でも彼はドブラのことを欲していた。」(BV1/19.29)

(10a), (10b) は人称代名詞対格形が、(10c), (10d) はその他の名詞句が直接目的語である例である。Пѣ を伴った直接目的語の接語重複が右方転位で実現している場合の例数は 80 例確認された。これは、左方転位の 28 例と比較するとかなり多い。百分率で示すならば、左方転位が占める割合は 26% である一方で、右方転位が占める割

合は 74% ということになる。また、右方転位で重複される要素としては、定冠詞か指示代名詞を伴った普通名詞か固有名詞が 31 例見られ、これ以外に人称代名詞が 43 例、定代名詞が 6 例確認されたことは注目に値する。Krapova & Tisheva (2006) 及び Тишева & Кръпова (2009) によれば、ブルガリア語に一般的な特徴として、人称代名詞の接語重複が右方転位で実現する例はきわめてまれであり、定代名詞の例は、少なくとも彼女たちが検討した資料中では、皆無であるという。我々のブラネシュティ方言は、少なくとも ПЪ を伴った直接目的語の場合に限ると、明らかにこのブルガリア語に一般的な傾向から逸脱している。定代名詞（当方言では、*cere* となる）が右方転位により接語重複されている例も、以下 (11) に二例示しておこう。

- (11) a. *Дакò ги устàи, ие ги зè*  
 if them leave.PRS.2.SG. FUT. them.ACC.CL. take.PRS.3.SG.  
*пъ сèте за венъшки.*  
 AM. all+the.PL. at once  
 「もしそれを置いといたら、(彼は) 全部いっぺんにとってしまう。」  
 (TM2/06.58)

- b. *Ни ги научиф пъ сèте тый*  
 not them.ACC.CL. learn.AOR.1.SG. AM. all+the.PL. so  
*ут дъртите тес.*  
 from old.PL.+the.PL. these.PL.  
 「(私は) これらの年寄りたちからすべてを学んだわけではなかった。」  
 (BV2/1.43.32)

以上より、ПЪ を伴った名詞句が直接目的語である場合には、一般的なブルガリア語の傾向とは合致しない部分があることが確認された。それはすなわち、右方転位による接語重複が多く、またその右方転位により重複を受ける要素は、一般的には見られない人称代名詞や定代名詞なども多く含まれるということである。

### 3.3. 前置詞 ПЪ を伴わない直接目的語の接語重複

次に、前置詞 ПЪ を伴わない直接目的語の接語重複についてみていく。以下、(12) は左方転位、(13) は右方転位の例である。

- (12) a. *Тес тр'аба дъ ги*  
 these.PL. it-is-necessary.PRS.3.SG. SMP. them.ACC.CL.  
*угледът майките.*  
 look.PRS.3.PL. mother.PL.+the.PL.  
 「この子たちは、母親が(面倒を) 見なければならない。」 (DD1/1.13.40)

- b. *И п'ес'инте тий ги знам.*  
 also song.PL.+the.PL. those them.ACC.CL. know.PRS.1.SG.  
 「それらの歌も（私は）知っている。」(BV2/2.32.42)
- c. *Той ам ни май гу прим'аскъ дъштерё ми.*  
 he.NOM. but not more him.ACC.CL. accept.PRS.3.SG. daughter.F.SG. my  
 「でも、彼のことはうちの娘はもう受け入れなかった。」(TM1/24.41)

ПЪを伴わない直接目的語の接語重複が左方転位で実現する場合の例数は、全部で25例見られた。また、重複される要素はいずれも定名詞句であった。(12c)のみ人称代名詞の例である。ここでは Той という主格で表れているものの、重複している代名詞 *ry* と同一指示であり、接語重複の例とすることができよう。いわゆるハンギング・トピック (Hanging Topic Left Dislocation) の例と判断できる<sup>xii</sup>。

次に、右方転位の場合を見ていく。

- (13) a. *Тий ги приказъши два из'ук'е.*  
 so them.ACC.CL. talk.PRS.2.SG. two language.PL.  
 「それで（お前は）二つの言葉を話すのだな。」(BV2/24.26)
- b. *Ни йъ зъмъ никой мома дърта.*  
 not her.ACC.CL. take.PRS.3.SG. nobody girl.F.SG. old.F.SG.  
 「年取った女なんて誰も娶らない。」(TM2/28.37)
- c. *Ги напраѣми нашт'е п'есни.*  
 it.PL.CL. make.AOR.1.PL. our+the.PL. song.PL.  
 「(我々は) 我らの歌を作った。」(DD1/16.43)

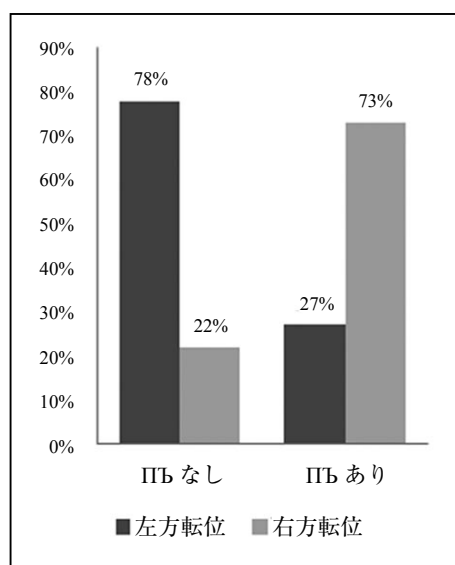
ПЪを伴わない直接目的語の接語重複が右方転位で実現する場合の例数は、7例のみ見られた。重複される要素は、7例中5例が語彙的な名詞句 (full noun phrase) であり、残りの2例が定代名詞であった。

ПЪを伴わない直接目的語の接語重複に限った場合、ブラネシュティ方言にみられる特徴は、ブルガリア語方言の一般的な特徴に合致すると言えよう。すなわち、左方転位の例数が25例で78%なのに対して、右方転位の例数が7例で22%であり、左方転位の例数のほうが多い。また、右方転位では、定代名詞の重複が確認されたのが例外的であるが、それ以外で人称代名詞の重複がなく、むしろ語彙的な名詞句の重複のみが確認された。

### 3.4. 分析のまとめ

前節までで提示した前置詞 ПЪ の有無により生じる違いをここで整理する。まず、Krapova & Tisheva (2006) 及び Тишева & Кръпова (2009) が提示した、ブルガリア語方言の目的語接語重複にみられる一般的特徴を今一度確認しよう。彼女らによると、一般的に右方転位に対して左方転位の例数が圧倒的に多くなる傾向があるという。また、重複される要素については、左方転位では様々な要素が重複されうるのに対して、右方転位では語彙的な名詞句 (full noun phrase) が好まれ、人称代名詞の例はまれで、定代名詞の例は皆無であるという。

まず、左方転位と右方転位の例数の対比であるが、ブラネシュティ方言では、ПЪ の有無により、次のような異なった結果が生じた。すなわち、ПЪ を伴わない直接目的語の接語重複の場合は、左方転位は 25 例 (78%) なのに対して、右方転位は 7 例 (22%) であった。一方で、ПЪ を伴った直接目的語の接語重複の場合は、左方転位の例数は 29 例 (27%) なのに対して、右方転位は 79 例 (73%) を占めた (cf. 右グラフ)。これは、ПЪ を伴わない場合、すなわち、ブルガリア本国のブルガリア語方言と同様の状況では、ブルガリア語方言に一般的な特徴と同じ傾向が見いだされるが、ブラネシュティ方言 (及びルーマニアのブルガリア語方言) にのみ見られる ПЪ を伴った場合には、右方転位の例数が左方転位の例数を上回り、一般的とされる特徴から大きくずれるような傾向がみられるのである。



次に、重複される要素に着目しよう。ПЪ を伴わない直接目的語の接語重複の場合には、概して、定冠詞や指示代名詞を伴った定名詞句が接語重複されており、Младенов (1993) の指摘通り、ブルガリア語に一般的な特徴に沿った傾向がみられる。その一方で、ПЪ を伴った直接目的語の接語重複の場合には、とりわけ右方転位の場合に異なった特徴がみられる。それは、重複される要素として人称代名詞が多く、定代名詞の例も数例見られるということである。ブルガリア語方言に一般的な傾向としては、右方転位で人称代名詞や定代名詞が重複されるような場合は極めてまれとされるのに対して、ブラネシュティ方言では、むしろそれらの例が、それ以外の名詞句の例数を上回っているのである。

ゆえに、ブラネシュティ方言では、前置詞 **ПЪ** の有無によって、直接目的語の接語重複の実現に際して、ブルガリア語に一般的なモデルとの間に差異が生じていることが示された。

#### 4. 結論

前章におけるブラネシュティ方言の目的語接語重複の分析を踏まえて、本稿では、次の点が明らかになった。

まず、直接目的語に前置詞 **ПЪ** を伴うような用法がある。その使用は、人称代名詞対格形の前ではほとんど義務的である一方で、それ以外の名詞句では随意的な傾向がある。ただし、人を指示する場合にのみ用いられるということは言うことができる。この前置詞 **ПЪ** の使用とその用法に関しては、ブラネシュティ方言以外のルーマニアに分布するブルガリア語方言にも広くみられるものであることが知られ、ルーマニア語からの影響によりもたらされたものであることが指摘されている (cf. Младенов 1993, Димчев 1974)。

次に、ブラネシュティ方言における目的語の接語重複を、左方転位と右方転位とで比較した場合、その例数は左方転位が 65 例 (37%) なのに対して、右方転位は 109 例 (63%) であり、右方転位の例数が左方転位の例数を上回る。これは、ブルガリア語に一般的とされる、右方転位に対する左方転位の圧倒的に広範な分布という傾向とは明らかに異なる。また、**ПЪ** を伴った直接目的語に分析の対象を絞ったとき、左方転位の例数が 29 例 (27%) なのに対して、右方転位の例数は 79 例 (73%) であり、やはり右方転位の例数が左方転位の例数を上回る結果となった。これは、**ПЪ** を伴わない直接目的語の接語重複の場合には、左方転位の例数が 25 例 (78%) で、右方転位の例数が 7 例 (22%) であり、左方転位の例数のほうが多いのと比べると、その特異性は明らかである。

以上のことから、ブラネシュティ方言における直接目的語の接語重複は、直接目的語が前置詞 **ПЪ** を伴う場合に、ブルガリア語に一般的な傾向から逸脱しているということができる。

さて、本稿の結論と Младенов (1993) の結論には、違いがみられる。Младенов (1993: 305-306) は、3.1. でも述べたように、**ПЪ** を伴った直接目的語の重複にも着目しているものの、ブラネシュティ方言を含むミジャ方言群に見られる目的語接語重複は、ブルガリア語の一般的なモデルから逸脱するものではないと述べている。一方で、本稿の結論は、上にも述べたように、**ПЪ** を伴う場合には一般的な傾向から逸脱するということである。このような違いの要因としては次のことが考えられる。Младенов (1993) は、**ПЪ** を伴った直接目的語の接語重複にも着目してはいるが、Тишева & Кръпова (2006, 2009) が挙げている左方転位 / 右方転位の分類や、重複される要素間



の違いには着目していない。そのため、ПЪを伴った直接目的語の接語重複が示す“逸脱”を指摘するには至らなかったものと考えられる。

よって、本稿では、直接の研究対象としたブラネシュティ方言に限るものの、Тишева & Кръпова (2006, 2009) の観点を導入して目的語接語重複の検討を行うことで、Младенов (1993) の結論に対する補完的な意味合いを持った結論を提示することができた。

最後に、今後の課題について述べる。

まず、ブラネシュティ方言における ПЪ の用法に関する更なる検討が必要であろう。前置詞 ПЪ は、ルーマニア語の PE の直接の借用であるとされるので、その用法や機能も受け継いでいることが仮定される。実際に、人を指示する名詞句に用いられる傾向があることは、ルーマニア語の PE と並行している。ゆえに、ルーマニア語の PE との対照を通して詳細な検討を行うことは今後の課題である。

次に、ブラネシュティ方言における接語重複の使用は、前置詞 ПЪ の借用とともに、ルーマニア語の影響を受けて拡大している可能性があり、言語接触を通じた文法化進行の可能性について検討する必要があるだろう (cf. Heine & Kuteva 2006 etc.)。本稿において明らかになった、ПЪ を伴う場合に特異な傾向（右方転位による接語重複が増えること、人称代名詞が右方転位により頻繁に接語重複されること）がみられることは、ルーマニア語の接語重複のモデルを引き継いで、文法化が進行したことを強く示唆している。ルーマニア語との言語接触による文法化進行の可能性を探るうえでは、ルーマニアへの移住以前のブラネシュティ方言の状態を知ることができる資料にあたる必要がある。この際、ブラネシュティ村の住人の祖先が移住する前に住んでいたブルガリア国内のシリストラ近郊の方言は、ルーマニア語と接触する前のブラネシュティ方言のかつての状態を映し出す資料として有効であろう。

また、ブルガリア語の接語重複がトピック化と関連が深いことを踏まえ、目的語がフォーカスである場合にも右方転位での接語重複が耐えうるかなどの視点からも、文法化が進んでいるかを検討する余地があると考えられる (cf. Суган 2012)。

そして何よりも、以上のことを検討していく上では、より多くの一次資料の収集が必要であることは言うまでもない。また、ルーマニア語との言語接触により文法化が進んでいるかどうかを検討するうえでは、ルーマニア及びブルガリア本国の同系統の諸方言との対比に加えて、ルーマニア語との綿密な対照研究も欠かせないであろう。

【略号一覧】

ACC = accusative, AM = accusative marker, AOR = aorist, CL = clitic, DAT = dative,  
DM = dative marker, EVD = evidential mood, F = feminine, FUT = future tense marker,  
IMPF = imperfect, M = masculine, N = neuter, NOM = nominative, PL = plural,  
PRS = present, SG = singular, SMP = subordinating modal particle

【参考文献】

- Асенова, П. (2002) *Балканско езикознание: Основни проблеми на балканския езиков съюз. (Второ издание)*. Велико Търново: Faber.
- Болокан, Г. (1968) Болгарский говор села Брэнешть. Вокализм. *Revue roumaine de linguistique*, 13, No.2, 147-164.
- Джонова, М. (2004) Конструкции от типа ‘Аз ми се струва’ в българската разговорна реч. *Проблеми на българската разговорна реч*, кн.6, 107-116.
- (2007) Удвояване на допълнението в говора на българските павликяни в Сърбия. *Българските острови на Балканите*, 170-179.
- Димчев, К. (1974) Морфологично-синтактични модели, установени под румънско влияние в българския говор на с. Валя Драгулуй (Румъния). *В памет на професор Стойко Стойков (1912-1969) Езиковедски изследвания*, 255-259.
- Еников, Зл. (1983) *История на Калипетрово. Силистренски окръг*. Калипетрово: Кметство с. Калипетрово.
- Жечев, Н. (1983) Към историята на изучаването на българските емигрантски заселища в Румъния през Възраждането. (По случай 100 години от рождението на акад. Стоян Романски). *Българска етнография*, кн. III, 51-60.
- Кочев, Ив. (1969) *Гребенският говор в Силистренско. С особен оглед към лексикалната му система. (Трудове по българска диалектология, кн. V)*. София: Издателство на БАН.
- Лопашов, Ю. А. (1978) *Местоименные повторы дополнения в балканских языках*. Ленинград: Наука.
- Маслов, Ю. С. (1982) *Грамматика на българския език*. София: Наука и изкуство.
- Минчева, А. (1969) Опит за интерпретация на модела на удвоените допълнения в българския език. *Известия на института за български език*, кн. XVII, 3-50.
- Младенов, М. (1993) *Българските говори в Румъния*. София: Издателство на БАН.
- Романски, Ст. (1930) *Българите във Влашко и Молдова. Документи*. София: Държавна печатница.
- Стойков, Ст. (2002) *Българска диалектология. Четвърто издание (фототипно)*. София: Академично издателство „Марин Дринов“.

- Сугаи, К. (2012) Удвояване на допълнението и фокусът в българския език. *Време и история в славянските езици, литератури и култури, Том първи. Езикознание*, 55-62.
- (in press) Удвояване на допълнението в българския говор на с. Брънещ, Румъния. *Проблеми на социолингвистиката*, т. XI, 109-114.
- Тишева, Й. & Джонова, М. (2006) Старият “нов” топик. *Славистика и общество*, 231-237.
- Тишева, Й. & Кръпова, И. (2009) Конструкции с удвоено допълнение в българските диалекти. *Езиковедски изследвания в чест на чл.-кор. проф. д-р Тодор Бояджиев, проф. д-р Венче Попова и проф. Петър Паиов*, 209-220.
- Тишева, Й. (2009) За словоредните модели на българското просто изречение. *Отговорността пред езика. Сборник, посветен на 65-годишнината на проф. д-р. Кина Вачкова*, кн. 3, 244-255.
- Цивьян, Т. В. (1965) *Имя существительное в балканских языках*. Москва: Наука.
- Bolocan, Gh. (1958) Cu privire la corelația de sonoritate în graiul bulgar din comuna Brănești. *Studii și cercetări lingvistice*, 4, 491-495.
- (1960) Observații asupra grupurilor consonantice în graiul bulgar din comuna Brănești. *Fonetică și Dialectologie*, Vol. II, 105-120.
- (1969) Graiul bulgarilor din Brănești (Jud. Ilfov). Consonantismul. *Studii de slavistică*, vol. I, 163-223.
- Franks, S. & King, T. H. (2000) *A Handbook of Slavic Clitics*. New York: Oxford University Press.
- Guentchéva, Zl. (1994) *Thématisation de l'objet en bulgare. Nouvelle édition, revue et corrigée*. Bern: Peter Lang.
- Heine, B. & Kuteva, T. (2006) *Language Contact and Grammatical Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krapova, I. (2004) Word order in Topic-Focus structures in the Balkan languages. *L'Europa d'oltremare. Contributi italiani al IX congresso internazionale dell'Associazione Internationale d'Études du Sud-Est Européen. România Orientale*, 17, 139-161.
- Krapova, I. & Cinque, G. (2008) Clitic reduplication constructions in Bulgarian. *Clitic Doubling in the Balkan Languages*, 257-287.
- Krapova, I. & Tiševa, J. (2006) Clitic reduplication structures in the Bulgarian dialects. *Diahronija in sinhronija v dialektoloških raziskavah*, 415-422.
- Roman, L. (1984) Așezări de bulgari și alți sud-dunăreni în Țara Românească (1740-1834). *Relații româno-bulgare de-a lungul veacurilor. Studii*, Vol. II., 126-143.
- Tisheva, Y. (2007) On Right Dislocation and Marginalization in Bulgarian. *Linguistic Investigation into Formal Description of Slavic Languages*, 389-397.
- 菅井健太 (2012a) 「ブルガリア語方言における定語の語順に関する一考察—ルーマニア・ブラネシュティ村の方言を例に—」『スラヴ文化研究 第十一号』, 98-135.
- (2012b) 「ブルガリア語における“先取り式”接語重複について」『日本スラヴ人文学会誌スラヴィアーナ 第4号』, 11-33.

【註】

- i Google マップ ©2012 Google.
- ii ブルガリア人がやってきた年代に関して、筆者が最高齢のインフォーマントから直接得た情報によれば、それは 1780 年代であったという。Roman (1984) の提示するデータは、18 世紀後半に最初の移住者がやってきたことを示しており、このインフォーマントの情報に合致している。
- iii グレーベンツィ (гребенци) は、シリストラ近郊に住むブルガリア人住民の名称として用いられる。
- iv ブラネシュティ方言を本稿の研究対象とした理由は他にもある。例えば、目的語接語重複と、Младенов (1993) などの先行研究で知られていた前置詞 ПЪ との関連を探ることは、本稿の主要な目的の一つであるが、ブラネシュティ方言では、筆者がこれまでに調査した方言中では唯一、前置詞 ПЪ の使用が頻繁に観察された。また、1.4. で後述するが、ブラネシュティ方言はこれまで音声を対象とした先行研究はあるが、目的語接語重複的を絞った研究が Суган (in press) を除いて皆無であったことも、当方言に着目した理由として挙げられる。
- v ヤットの境界とは、かつての母音ヤット (ɤ) が現代ブルガリア語の方言でどのような音対応をなすかを基準にブルガリア語の方言を東と西に分ける等語線である。ヤットの境界よりも西ではもっぱら [e] が、東では音環境によって [ʼa] と [e] が (一部の方言では常に [ʼa] が) 対応する。(cf. Стойков 2002: 83-85)
- vi 本稿における例には、全て英語によるグロスと和訳を付す。グロスにおいて用いる略語は本文末の一覧を参照されたい。ただし、グロスについては、関係があるものを中心につけており、一部省略したものもある。ブラネシュティ方言の例はいずれも、基本的には Младенов (1993) ら先行研究の表記法に従っている。標準ブルガリア語とは主に次の点で異なる。まず、я, ю, ш の字母は用いず、分析的に表記する。また、ÿ は [w] または [β] を表し、主に [f] または [v] の変異として現れる。ы は [i] を表し、ルーマニア語の借用語に現れる。アポストロフィは子音の口蓋化を示す。また、アクセントを有する語全てにアクセントを表記する。例の和訳の右隣に、発話者と音声ファイル中の出典箇所を明記した。
- vii 通常、人称代名詞の与格形は、与格標識の на と対格形の人称代名詞で形成されるが、ブラネシュティ方言では、この与格標識の脱落がおこることがある。Младенов (1993: 267) もルーマニアのミジャ方言群における同現象の存在を指摘している。
- viii Младенов (1993) はこの ПЪ に対して、предлог「前置詞」と частица「小詞」の両方のタームを無作為に用いている。ここでは仮に「前置詞」と称しておく。
- ix ルーマニア語の PE は、ブラネシュティ村においては [pã] と発音される。PE を [pã] と発音するのはムンテニア地方のルーマニア語の特徴でもある。

また、Младенов (1993: 381-382) によれば、ルーマニアのブルガリア語諸方言では、PE の翻訳借用である НА の使用もみられる場合があるという。ブラネシュティ方言でもそのような例は確認されている (cf. Суган (in press): 112)。
- x Младенов (1993: 381) は、ПЪ が用いられうる直接目的語の種類・場合を 6 通りに分類して提示している: 1) 人や動物を指す名詞、2) 個人名、3) 人を表す名詞化された形容詞、4)

人称代名詞の対格形、5) 自分の名を名乗るときに人称代名詞対格形の前で義務的に使用、6) その他の代名詞（指示代名詞・定代名詞）。

- <sup>xi</sup> 標準語では「助ける」という意味の動詞（помогна）の目的語は与格をとるが、当方言では常に対格をとる（cf. 10b）。「助ける」という意味の動詞が対格の目的語をとるルーマニア語の影響の可能性が考えられる。また、(10a) ではルーマニア語からの借用語（< a ajuta 「助ける」）が用いられ、やはり対格の目的語をとっている。
- <sup>xii</sup> ハングング・トピックについては、たとえば、Джонова (2004), Крапова (2004), Крапова & Cinque (2008) などを見よ。このタイプの接語重複は、ブラネシュティ方言でも、語用的重複、文法化重複にかかわらず、多く例が見られた。

## **Удвояване на допълнението и ПЪ в българския говор на с. Брънещ, Румъния**

**Кента Суган**

Предмет на настоящата статия е удвояването на допълнението и предлогът ПЪ в българския говор на с. Брънещ, Румъния. Брънещкият говор (БГ) принадлежи към мизийски тип говор. Според Младенов (1993), който разкрива характеристиката на удвояването на допълнението в мизийските говори в Румъния, моделът за удвояване на допълнението не се отклонява от общобългарския модел на това явление. Въз основа на материалите, събрани по време на теренно проучване, ще се опитаме да изясним дали явлението в БГ има паралелни черти с общобългарския модел, както отбелязва проф. М. Младенов. Тишева и Кръпова (2009) твърдят, че в българските диалекти съществуват следните две тенденции при реализирането на удвояването: първата е по-широкото застъпване на лявата дислокация; втората е свързана с ограничения във връзка с избора на удвоения елемент при дясната дислокация. В работата се анализира удвояването на допълнението в БГ с оглед на тези две тенденции.

Според Тишева и Кръпова (2009) съществуват два структурни типа удвояване: прагматично удвояване и граматикализирано удвояване. Вследствие на анализа по това деление се изясни, че само прагматичното удвояване не отразява двете тенденции и може да се каже, че се отклонява от общия модел на удвояването в българските диалекти.

Същевременно внимание се обръща и на употребата на предлога ПЪ, който се употребява пред пряко допълнение в БГ. Допълнението с ПЪ също може да се удвоява, но при това се наблюдават следните отличителни черти: удвояването по-често се реализира по модела на дясна дислокация; не съществуват ограничения във връзка с избора на удвоения елемент при дясна дислокация. Много често се удвояват и пълни личноместоименни форми, които по модела на дясна дислокация се удвояват по-рядко в българските диалекти. От друга страна, подобни особени черти не са характерни при реализирането на удвояването на допълнението без ПЪ. Наблюдават се паралелни черти с общия модел на удвояването в българските диалекти.

Като резултат се достига до следния извод: моделът на удвояването в БГ съществено се отклонява от общобългарския модел на това явление, когато пред допълнението се употребява предлогът ПЪ.